

「確かな学力の定着を目指した授業改善の工夫」

～学ぶ楽しさや分かる喜びを味わえる効果的な RPDCA サイクルを通して～

I 研究の内容

(1) 児童の教科及び生活習慣や学習習慣の状況把握と改善すべき課題の整理

*全国学力学習状況調査（6年） *Q-U 検査（全学年）
*県学力把握調査（3・5年） *生活実態アンケート調査
*NRT（2～6年）・CRT（全学年）学力検査

⇒ 課題として

国語において、「読むこと」領域や漢字の読み書き、社会科において、資料の読み取りと活用能力に課題があること。生活実態については、就寝時刻や起床時刻が遅いことと、メディアへの接触時間が長いこと、さらには家庭学習が定着していないことに課題があることが分かる。

(2) チャレンジタイムのとりくみ（8：20～8：35）の15分間をしっかりと確保する。

月-朝読書

火-国語タイム〈漢字・スピーチ原稿作り・意味調べ・単語作り・文作り・NIE など〉

水-算数タイム〈基礎的な四則演算・文章題対策・公式確認・フラッシュカード・ドリルなど〉

木-チャレンジタイム〈5問10問確認テスト・スピーチ・群読など〉

金-朝読書

(3) 家庭での学習のあり方・保護者との連携

- ・家庭学習の手引きについて各学年で検討し、学校独自の手引きを作成し配布。
- ・家庭学習時間の目安〈学年×10分〉の定着を目指す。
- ・とりくみ方について、各クラスで指導。

(4) 学習規律や授業ルールの確認（環境面含む）

- めあては青、まとめはピンクで囲み、意識を促す。
- 教室前面には余計な掲示物は貼らない。学習規律定着に向けた掲示物のみとする。
- 多様な価値や考えに触れるような授業過程の工夫をする。自力解決の時間を確保する。
- できるだけ自分の考えを、言葉で書かせる活動を多く取り入れる。
- 学習形態の工夫〈個 → ペア → 小集団 → 全体〉
- 児童の言語環境を整える掲示物等の工夫（新聞コーナー・言葉のおくりもの）

(5) 学習会

- 「社会科における授業改善のポイントと授業実践に向けて」

講師 山梨県教育庁義務教育課 指導主事

饗場 宏 先生

- 「国語科における授業改善のポイントと授業実践に向けて」

講師 山梨県教育庁義務教育課 指導主事

重田 誠 先生

小川知子 先生

- 「QUを生かした学級づくりと実態把握について」

講師 都留文科大学 COC 推進機構 特任教授

品田笑子 先生

(6) 身に付けさせたい力と指導内容を明確にした授業づくり

【国語科】今年度、本校の授業改善プランを改訂し、「読むこと」を通して「身に付けさせたい力」を明確にした。それは単元を貫く言語活動や教材の持つ特性と大きく関わっている。単元を貫く言語活動を通して教材の特性を生かした指導を行い、それによって身に付けさせたい力の育成に迫ることができると考える。それぞれの相互関係をしっかりと見極めた指導計画づくりに取

り組んでいる。

【社会科】改善プランに示した社会科の「身に付けさせたい力」を学年ごと示し、単元を通した学習問題の設定を行った。さらに、知識を整理した図を活用し、調べて身に付ける力や取り上げたい用語などを分かりやすく整理することで、1時間ごとの指導内容を児童にも明確にすることができた。さらに、観察・資料活用能力については、各学年の系統を考慮し、それぞれの段階で育成したい力を意識して授業づくりを行っている。

(7) 学級の実態に応じた指導過程の工夫

授業や生活ルールの定着やリレーションの形成、承認感を高めるなど、各クラスのQ-U検査果の分析から決定した取組を継続して行っている。日常の取組の中では、エンカウンターを短時間で意図的継続的に取り入れたり、「いいところ探し」をしたりと、互いの交流活動などがその一例である。授業の中でも、指示の出し方や個別支援など、授業形態や指導方法においても実態に応じた工夫を取り入れるようにしている。指示は短く簡潔にすることや複数指名、話し合いはペアから集団へなどがその一例である。

II 成果と課題

1 成果

- ・各種学力検査やQ-U検査、生活実態調査をもとに本校の実態を分析し、学力面や生活面の課題を明らかにして研究を進めることができた。また、課題解決に向けた研究内容を共有することができた。
- ・学習における課題を把握した上で、国語科では「読むこと」領域の改善プランを、社会科では「資料活用」についての改善プランを改訂することができた。中でも、身に付けさせたい力を明確にし、学級の実態に応じた指導過程を工夫して指導にあたることができたことは大きな成果である。
- ・朝のチャレンジタイムを通し、特に国語や算数の基礎基本を定着させるためにドリルや漢字練習に取り組んだり、読書の習慣化を図ったりすることができた。算数では全校でドリルを購入し、学習内容の定着に役立てることができた。
- ・昨年度からの取り組みとして、独自に生活実態調査を行い、生活の中からも課題を見つけ研究に生かすことができた。学習の定着と生活向上には大きな関わりがあり、全学年の発達段階に応じた授業を行うことで、早起き早寝やアウトメディアについて、家庭と連携しながら進めることができた。保護者からも、家庭内の生活を見直す良い機会になったという声が多数寄せられた。
- ・全クラスが公開授業研究を行い、たくさんの実践内容、授業のアイデア等に触れることができた。個々の研究に対する意識も高まり、主体的に研究することができた。

2 課題

- ・全クラス公開だったため、各学年の横のつながりが薄くなり、各教科の学年課題を共有することができなかった。
- ・国語科と社会科の授業交流ができれば良かった。それぞれの課題が見えなかった。
- ・特別支援の先生方は、自分の授業研究と生活向上部会との両部会の作業が重なり、負担が大きかった部分がある。

III 成果物

- ・研究授業、授業実践の指導案、ワークシート、資料等
- ・社会科における「知識を整理した図」及び、学年の系統表
- ・身に付けさせたい力を明確にした各学年の「授業改善プラン」
- ・指導助言いただいた講師の先生方からの資料
- ・生活向上に向けた取組に関する資料（「早起き早寝チャレンジ」「アウトメディアチャレンジ」）
(研究主任 小椋 規雄)